

溝口常俊 編著『古地図で楽しむ尾張』

風媒社 2017年1月 149頁 1,600円＋税

本書は、古地図をベースに、尾張地方を“みる・よむ・あるく”ためのガイドブックとある。名古屋（2冊）、岐阜、三重、三河についても同シリーズが出版されていて、本書が6冊目となる。このうち、『古地図で楽しむ なごや今昔』（2014年）と『明治・大正・昭和 名古屋地図さんぽ』（2015年）は同じく溝口氏の編である。

本書は3部構成で、Part 1「描かれた尾張」とPart 3「地図をつくる」を編者の溝口氏が執筆し、Part 2「尾張いまむかし」では尾張東部、尾張西部、尾張北部、名古屋地域ほか、知多の5地域別に様々なトピックが紹介されている。

Part 1「描かれた尾張」では、江戸時代の国絵図や郡図、村図、明治期の地籍図など、スケールが異なる古地図ごとに、その特徴と読図のポイントが解説されている。

尾張国絵図については、最古の1647（正保4）年と1701（元禄14）年、1838（天保9）年の3点、それに元尾張藩士で画家の小田切春江作「尾三両国図」（1877）が紹介されている。幕府への伺下絵図とみられる正保図では、おそらくは幕府提出の正図には記載がなかったであろう木曾川・庄内川やその分流に付された「杵」記号、色分けされた郡別の領域区分、それに後筆の鷹狩り場記載などが紹介されている。元禄国絵図については河川や渡河点の記載に注目し、天保国絵図では実高表記と新田開発の進展を指摘する。

この他に、国土地理院所蔵の伊能図「大日本沿海輿地全図」（明治初年の写本）で尾張地方も紹介されている。伊能図は基本的に海岸線図で内陸部は空白になるケースが多いが、当地域について言えば、東海道・中山道のみならず、佐屋路、美濃路、岐阜街道、飯田街道などにも測線が確認できる。伊能忠敬らは西日本測量の帰路ごとにルートを変えて内陸路測量も行っていった。本図は伊能測量の足跡を示すとともに、尾張名古屋が主要街道が交差する要衝地であったことを再認識させる。国絵図仕立ての「尾三両国図」では、名古屋鎮台や大区制の行政区画など新旧の地図情報が混在しているところが興味深い。

郡図としては、1844（天保15）年編纂の『尾張

志』付図（小田切春江画）が紹介されている。手彩色の見取図ではあるものの、集落部が着色され村界が引かれている。国絵図には描かれていない新田や船渡し、溜池などの地図情報も詳しい。徳川林政史研究所が所蔵する天保年間（1830～44）作成の村絵図も紹介されている。本書に掲載された春日井郡瀬古村絵図では、凡例の「此印御圍堤通り」から輪中の形状を読み取れる。愛知県公文書館に所蔵される愛知県下全域の地籍図・地籍帳については、1884（明治17）年当時の土地区画、地番、地目などから低湿地の「島畑」景観や干拓地・丘陵地における新田開発の復原に有効な資料的価値が説明されている。こうした大縮尺の絵図資料を利用することで、幕末～明治前期の尾張地方における村々の実像を把握できることになるが、詳細は溝口氏の『日本近世・近代の畑作地域史研究』（名古屋大学出版会）を参照していただきたい。

Part 3で溝口氏は、これらの古地図や近世地誌書をもとに尾張国の地域性について解説している。前後するが、先にPart 3を紹介しておこう。

Part 3で溝口氏は、1672（寛文12）年の『寛文村々覚書』に記載された情報をもとに、宿場町の助郷圏、尾張国各村から名古屋城下までの認知距離や年貢米の運搬手段についてGISを用いて作成した地図を呈示している。そこに特徴づけられるのは、名古屋城下の西側を流れる庄内川や木曾川およびそれらの分流の功罪である。これらの河川は水路として利用された反面、氾濫時には交通の妨げにもなった。GIS図からはそうした地域性が読み取れる。同様に、名古屋市域にあたる寛文期の村々では、東部の丘陵地、西部の低湿地ともに水田が卓越していたが、低湿地の村々であっても畑地率が30%前後を占めた。乏水性の東部丘陵地では溜池を築造することで水田率が高まったのに対して、西部低湿地の村々では、堀田と島畑を組み合わせた木曾川下流域特有の土地利用を反映した結果とされる。天保期の村絵図や1884年の地籍図からも、そうした農地景観を確認することができる。溝口氏は、島畑は「日本の変わることの無かった小農家族経営を象徴する景観」であり、「世界を見渡しても日本にしかなく、棚田以上に日本を象徴する景観」と指摘する。

最後に、Part 2「尾張いまむかし」についてみ

ていきたい。この章は編者の溝口氏をはじめ28名の執筆者が46項目(コラム・トピック・古地図紹介を含む)を取り上げる。執筆者紹介によれば、歴史学・歴史地理学関係者以外にも公民館長、文筆家、記者、元鉄道資料館勤務の方々など多士済々である。内容的にも、城下町・町並み・街道・産業の沿革や変遷、災害・治水事業などに関わる歴史地理色の濃いテーマだけではなく、津島天王祭や名鉄の変遷、醸造業や陶器・焼物、海水浴場など多岐にわたる。1項目1〜4ページ仕立てで、尾張5地域の特徴がコンパクトに紹介されている。以下では一部を紹介する。

「侍たちの長久手古戦場巡り」では、1584(天正12)年に起きた小牧・長久手合戦の故地を巡る尾張藩士が紹介されている。記念碑を建立する藩士や語り部となった住職や神主もいたようである。尾張藩初代藩主は、家康の実子(九男)で1600(慶長5)年生まれの徳川義直である。それゆえ、古戦場巡りをすることで、尾張藩士は神君(権現)家康に思いを馳せて忠誠を誓ったのであろう。まさに、記憶遺産として受け継がれたのである。

「中世末からゼロメートル地帯を生き延びてきた服部家住宅」は、1576(天正4)年に建てられた重要文化財の服部家住宅(弥富市荷之上町)を取り上げる。1959(昭和34)年の伊勢湾台風で浸水も経験した低湿地に立地する服部家住宅が、なぜ440年以上も存続できたのか。溝口氏は、服部家が長く庄屋を務めただけでなく、地元の津島天主祭への貢献や女性世帯主がイエの存続を支えてきたことを理由にあげている。

織田信長も見物したとされる津島天主祭については、本書に掲載された江戸前期の「津島祭礼図屏風」や小田切春江画の「尾張津島天主祭真景朝祭図」などからも、その豪華さを見て取れる。500近くの提灯を点火した津島五車(だんじり)を載せた巻藁舟が天王川を進む宵祭と、能人形を飾り紅白の梅花や幕等装飾を施した車楽舟が市江車を先頭に水上を進む朝祭は、牛頭天王の賛迎行事を祭礼化したものとされ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

トピック「黒川紀章の『農村都市計画』(1960)について」では、海外でも反響を呼んだ「農村都市計画」プロジェクトが、前年の伊勢湾台風時に

当地に滞在し自衛隊に救助された黒川紀章の実体験にもとづく水害復興計画であったことを紹介している。「農村都市計画」は、既存堤防と同じ地上5〜8mの高さに一辺500mの正方形をなす鉄骨造/RC造の設備フレームを設け、そこに2,000人が収容可能な地上に浮かぶ農村都市をつくるという奇想天外なプランである。この計画は、のちに黒川が提案した「農村アパート計画」でその一部が実現したという。東日本大震災を経験した今日、防災の観点からわれわれはこうした農村都市計画についても再考する時なのかも知れない。

知多半島にも四国八十八ヵ所の写し霊場がある。「知多四国霊場」と称し、知多市妙楽寺の住職亮山が発願し1824(文政7)年に開創された。北は豊明市の一番札所曹源寺から知多半島の南端三十六番札所の遍照寺を經由して半島を一周するルートで、全行程は約200km、徒歩では5〜7日かかる。現在も年間7〜8万人が巡拝するという。

Part2では、吉田初三郎の「天下之絶勝日本ライン名所図絵」「一宮市鳥瞰図」「南知多遊覧交通名所図絵」「半田市鳥瞰図」「陶都の常滑」の5点の鳥瞰図も紹介されている。本書のトピック「沿線案内図でたどる名鉄の歴史」によれば、1921(大正10)年に設立された名古屋鉄道は、郊外線の乗客数を増やすために木曾川=日本ラインの観光地化に乗り出し、吉田初三郎に「天下之絶勝日本ライン名所図絵」の作成を依頼している。名鉄は関東大震災後に犬山にあった同社の蘇江倶楽部を仮画室として初三郎に提供し、初三郎は1936(昭和11)年まで犬山を拠点に活躍した。その関係で昭和初期の名鉄沿線の鳥瞰図も数多く手がけ、鉄道やバス路線が強調された他の4点の鳥瞰図も第二次大戦前に画かれている。

本書は一般向けの町歩きガイドブックではあるが、乏水地域と水害地域とがコントラストをなす尾張地方の地域的特性を理解するのに役立つ歴史地誌書の仕立てにもなっている。古地図のみならず写真も多く、往時の地域の様子や変貌ぶりをビジュアルにみることが出来る。「尾張学」をはじめするにはもってこいの手引書でもある。尾張藩士のように、本書を片手に名鉄めぐりやフィールドワークを楽しまれてはいかがか。

(平井松午)